

ヤスクニ・レポ 263 この国で異質性を貫く 川越 弘(日本キリスト教会沖縄伝道所牧師)

戦争がいよいよ間近になっています。1月7日、日米両政府は、外務・防衛相会合を行い、共同声明で台湾有事の戦争準備を進めています。戦争が始まると、再び沖縄を含む南西諸島が戦禍に巻き込まれることでしょう。

いつも沖縄は日本の犠牲になってきました。沖縄差別の根底にあるのは天皇制です。琉球処分は、天皇の民でない琉球を処分することでした。沖縄に皇民化という同化政策が推し進められ、その帰結として沖縄戦の悲劇がありました。その後、悪辣な援護法で日本(厚生省)は、巧みに天皇と国家の戦争責任を消滅させています。

天皇裕仁は東京裁判免罪のために、マッカーサーと日米合作政治を行いました。1947年9月、裕仁は「天皇メッセージ」を米国に伝えた後、米国は沖縄の土地を収奪してアジア最大の戦略基地にしたのです。1951年、裕仁は天皇制をアメリカの擁護を目的に、日米安保条約(日米地位協定)を結びました。

1972年5月15日、沖縄は日本復帰(併合)しました。米国政府にとって、基地の安定保持を条件とした施政権返還です。日本にとって、「戦争によって失われた天皇領土の回復」であったのです。その年の10月、自衛隊は那覇に駐屯しました。その式の桑江群長訓示の最後に、牛島司令官の辞世句「秋またで 枯れ行く島の 青草は 皇国の春に 甦らなむ」を詠いました。日本復帰(併合)50年、自衛隊は「皇国の春に蘇る」新たな現代版沖縄戦を起こすような、危険な時に来ているのです。

2022年10月「日本復帰50年」に、天皇徳仁が沖縄に来ます。この年は、南西諸島の自衛隊配備が完成する年です。そこで天皇の「おことば」が語られます。「統合の象徴」天皇が「日本人の心は一つ」であると、沖縄と日本の一体化を宣言することでしょう。

この国は76年前、神の裁きの下で戦争に敗れて、新しい生き方が始まったにもかかわらず、再び

闇の時代に戻ろうとしています。改憲主義者らは、「日本国憲法はたかだか76年、日本の伝統ある天孫降臨は2079年の歴史だ」とホラを吹いています。

嘘ででっちあげ、日本人を洗脳し、沖縄の人々を奴隷にしてきた支配層優先の天皇制国家は、人々の心の内面の自由を奪い取り、人間性を低めてきました。天皇制と靖国の英霊は幻想です。私たちの信仰の闘いは、この幻想と闘うことです。日本国民は、「人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果の中で、過去幾多の試練に堪へ、現在及び将来の国民の侵すことのできない永久の権利として」(憲法第97条)の基本的人権を、心に刻みつけたにもかかわらず、棚から牡丹餅を受け取るように、国家権力に依存する体質を温存してきました。汗と血を流して闘って勝ち取って来なかったのです。

日本の教会の伝道は、この国の体制に合わせてきました。戦前・戦中の日本の教会は、神の民よりも、日本国という絆で結び合って伝道してきました。しかし教会は、この国では異質な存在です。聖書から崇めるべき真実の権威を知っているので、天皇偶像の危険性を知っています。キリスト者がこの国で「よそ者」であることは必然的なことで、避けることができません。避けてはならないのです。教会が教会である限り、教会の異質性は必然的です。これを、キリスト者の栄えある重荷として担い続けなければならなりません。キリスト者は少数者です。そのことを悲しんだり恥じたりする必要はありません。この国で異質性を貫くことが、決して教会の自己主張や独善ではないのです。教会の異質性を貫くことは、この国に対する教会の最大の奉仕です。ヨーロッパの教会は、異質性を貫くことによって、国家の近代国家の成熟に貢献して来ました。その自覚と確信をもって、この国で異質な者としてあり続けるべきです。国家の資格について根本的な知識を語るのには、教会の他にありません(バルト)。それは教会の思い上りではない。教会が神の言葉に聞くとはい、そのようなことでありましよう。

2022年1月21日例会奨励
「偶像を造り、それらを拜んではならない」 出エジプト記20章3-5節
日本同盟基督教団 勿来キリスト福音教会 牧師 住吉英治

14年前のO教会での出来事

O教会を辞任して14年が経とうとしています。

私が東京品川にあったO教会に赴任後しばらくして書棚にある書類等を何気なく見ていると、戦争時に印刷された週報、月報等がありました。そこには以下に紹介するような内容が載っていました。これは2021年3月号でも紹介したものです。紙面がありますので再度紹介しておきます。

某年2月11日(日) 紀元節奉祝礼拝 黙禱、讚美歌、主の祈り、聖書、国歌一君が代二唱、祈禱、説教「祖国の為に」・・・

某年4月29日(日) 天長節奉祝礼拝・・・国歌一君が代二唱・・・説教「神を畏れ王を尊べ」以上の通りです。

私は当時「靖国問題特別委員会」(現「教会と国家委員会」)委員をしていたこともあり、これは大変なことだと受け止め、皆さんで勉強し、悔い改めましょうときまじめに訴えました。結果は以下の通り惨憺たるものでした。

第一に、これらのことが「偶像を造り拜むな」という戒めを破る罪であることを認識し、共有できなかったということです。私は当時そこにはいなかったのだからという思いもあったのでしょうか。つまり直接には関わっていないのだからということか。

第二は、当時関わった先輩たちを悪くいうのですか、教会の立派な歴史に傷を付けるのですかということです。この思いを持つ教会員の方は多かったと思います。特に年配の方はそうです。

第三に、これらの事柄・資料が教会員に知られず、見られてもいなかったという事実です。年配者においてしかりです。つまりこのような重大な偶像崇拜の罪が振り返りもされず、検証し継承もされていなかったということです。

これらのことに取り組んだ代償は、教会員の反対に遭い、O教会を辞することになったことです。

もしこれらのことが前任者においてなされていたのであれば、私がこれほど労することはなかったでしょう。

足下の課題

私がここで皆さんにお伝えしたいのは、私が正しく教会員の方が理解できず悪いという次元ではなく、いかにこれらの問題・課題が重たく、乗り越えるにエネルギーを要するかということです。

当時私たち二人の子どもは大学生で、品川は超便利が良く、都内の大学に通っていました。引っ越しすることになった時、息子には大学から遠い家賃が安いアパートに住ませ、娘は大学に頼み込み学内

の寮に入れていただきました。憐れみです。

ヤスクニ問題等、一般的なこととして取り組むには良いのですが、自分の教会・足下のこととなると次元が違ってきます。それは時限爆弾を抱え込んでいるようなものです。私はその爆弾を踏んでしまったのです。

私はこの問題・課題を取り扱い、悔い改めにまで導くべきか、それとももう少し先延ばしにするか迷いました。それは時限爆弾を踏むようなことになりつつあることを知ったからです。しかし、ここでやらなかったらこの先もやれないだろうと決意し、最後は断行する形でした。どこかにやがて教会員も理解してくれるだろうと一抹の期待もありました。このような罪を抱えたままでは教会は将来的に祝福されないと思っていました。

息子には遠いところに住ませ、娘は寮に入れ、兄弟ばらばら、親子ばらばら、私たち夫婦は死ぬような思いで現教会に赴任しました。

歴史のある教会は沢山あります。牧師・信徒の方には勇気を持って偶像崇拜の問題に取り組んでいただきたいと願います。そしてこれらは歴史を越えて全教会の課題でもあるのです。

これからの時代に向けて

現教会に引っ越して来て2か月位経ったある真夜中のことです。急に心臓の鼓動がドクンドクンと高鳴り始め、目が覚めました。心臓が膨れあがり破れてしまうのではないかと恐れ、すぐに着替えて近くの河原に行き、朝近くまで祈り続けました。O教会での出来事―無念さ、悲しみ、怒りなど―が一度に思い出され、無意識のうちに私の心臓を襲って来たのでしょうか。祈り疲れて眠り、気がつくと夜が明けていました。ああ私は生かされていると神さまに感謝しました。

O教会での出来事を教訓に、現教会では地道に一步一步礼拝の中の説教で語り、各資料等を用いて勉強会も持って来ました。祈祷会でも学びました。この作業は御国が到来するまで続きます。

皆さんも感じているように、今は終末の時代です。地球温暖化による災害、食糧危機、エネルギー問題、戦争の危機等があります。(マタイ24章参照)これらの危機の中に偶像問題が大きく頭をもたげてくるでしょう。(黙示録参照)私たちは信仰の闘いを継続し、強めていかなければなりません。

最後に私は現教会に導かれてきたことを神さまに感謝しています。双葉希望キリスト教会の創立などやりがいを持って取り組ませていただいています。また地方に来て、オンラインによる学びはとて役立っています。今後ともよろしく願います!!